令和５年度幼稚園学校評価（荘原幼稚園）

分　　野	評価項目	評価の着眼点	自　己　評　価 達成及び取組状況	評価（点数式）	学校関係者評価 評　価（記述式）	評価結果を踏まえた今後の取り組み
教育課程・指導	①学年・学級経営	教職員は、教育目標の達成を目指した学級経営を行っているか。	○各学年共に教育目標から自学級のねらいや目標を掲げ、指導計画の作成、日々の保育記録、保育評価を実施し、保育の資質向上に心がけている。 ○定期的な担任会では、各学年の実態を話し合い情報交換をしたり、互いにアドバイスし合いながら、ねらいを定め、今後の見通しをもった保育実践を図るよう努めていった。 ○保護者アンケートにおいて今年度は「園の特色や実態を生かした教育活動が行われている」の項目に高評価をいただき、園の取組への理解を深めてもらっている。	4	【幼稚園教育・幼児理解について】 ○幼児の主体性が大切にされている。 ○幼児一人一人を大切にした指導がなされている。 ○コロナ5類移行に伴って、園外活動が通常に戻り、日頃の教育・保育実践について保護者からの評価も高くなっている。 ○園内外の活動が、幼児の思いや願いを育てるために計画的に進められ、指導に当たられる職員が、幼児の思いを大切にしておられる様子が、素晴らしいと思う。 【特別支援教育について】 ○特別な支援が必要な幼児が行事等に参加できるよう工夫されていた。 【人権同和教育について】 ○人権・同和教育の視点は平常の生活の場で養うことが一番大切である。職員は日々人権意識が劣化しないよう意識をもって生活していくことが近道である。 【行事等について】 ○コロナや感染症との兼ね合いで、行事の開催方法が難しかったと思うが、工夫しながら保護者も参加できるようにしていた。 ○保護者からも「行事・活動を通じて、豊かな体験ができる場が用意されている」ことに対する評価が高く、職員の具体的な声掛けや幼児への関わり方、整えられた場に込められた意図が十分伝わっている優れた教育がなされている。 ○本年度は2年ぶりに外でファミリー運動会が開催された。競技が限られた狭い園庭を有効に活用され、みんながわくわくの運動会となった。 ○生活発表会のふるさとの自然・神話伝承を題材にした創作劇にも感心した。今後も自信をもって取り組んでいただきたい。 【保幼小連携について】 ○ここ10年来、小中高と不登校傾向の児童・生徒が増加してきている。今まで以上に保幼小の連携が大切である。 ○三園合同の交流でいろいろな活動ができており、就学に向けた意識ができたと思う。 ○小１ギャップについては、小学校と共に幼稚園教育要領を達成することで、ギャップは軽減されていると思う。保育要領との兼ね合いは気になる。幼保の連携（特に年長）教育内容はすり合わせはあるのか。	○「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について、どのような育ちを期待し、それに向けた保育の取組を計画・実践していくのか、3年間を見通しながら、各学年の教育課程を見直し、再検討していく。 ○記録日や担任会の継続、指導員を招いての園内研究会実施等を計画的に取り入れ、多面的な幼児理解と、遊びの循環を生むための保育環境や教師の支援の工夫に努める。 ○幼児一人一人へ丁寧に関わると共に、その保護者との関りを深め、共にその子を支え成長に導くよう、親子共にしっかりと信頼関係を構築していく。 ○支援を要する園児について、受容・共感的な姿勢を基本にして関り、全職員で「子供を語る会」を定期的に開催し、情報共有して支援法を探っていく。適宜、保育幼稚園課や関係機関など専門機関と連携を取るよう留意する。また、保護者に適切な情報をタイミングよく伝え、必要であれば支援ファイル作成に繋げていけるよう留意する。 ○日々の生活の中で、人権感覚を磨き、誰に対しても平等に思いやりをもって接していけるよう意識して人との関りを大事にしていく。親子共に意識を高めるための研修や人権標語作成の継続を図っていく。 ○行事については、今一度見直し、幼児にとって豊かな体験、経験を積むことができるよう内容を精選していく。 ○斐川東中校区連携推進の会での繋がりを生かし、互いを知る中で、更に自園の取組みを見直しつつ、連携を図る方法を探っていく。職員同士の連携の在り方に加え、園児同士、園児と児童とのふれあい交流活動も見直していきたい。
	②幼児理解	教職員は、一人一人の幼児の発達の姿から課題を捉えて保育を行っているか。	○年間を通して、学期毎に記録日を設け、幼児一人一人の育ちを読み取り、幼児理解を深めてきた。 ○補助教諭や保育補助員と日々連携を図り、保育環境を整えながら幼児一人一人に対応した取組に努めてきた。 ○保護者アンケートにおいて「教職員は一人一人の子供をよく理解し…」の項目は昨年度同様、高評価をいただいている。	4		
	③特別支援教育	特別な支援を必要とする幼児の実態や課題を明確にし、計画的・組織的に指導を行っているか。	○支援を要する幼児の実態把握に努め、職員間でも情報共有しつつ、その子の興味関心、困り感等を探り、必要な支援を施したり、関係機関に繋げたりしていった。 ○巡回訪問の指導を受け、その子にあった保育環境や支援方法を補助教諭とも連携を図りつつ工夫していくことに努めた。	4		
	④人権・同和教育	教職員は、自らの人権感覚を磨き、幼児に人権意識の芽生えを培うように配慮しているか。	○人権・同和教育目標を幼稚園・学級経営の基盤に据え、人権感覚・意識を捉えた指導に留意し取組んできている。幼児一人一人を大切に受け止め、肯定的な関りや言動のやり取りに配慮し、友達同士互いに良さを認め合える学級づくり、園経営に努めてきた。 ○保育実践において、様々な教材の中で、人権・同和教育につながる絵本や紙芝居を取り入れたり、絵図などを用いて話の内容をわかりやすく伝えたりする工夫を加えていった。	3		
	⑤行事	教職員は、行事を幼児の発達を促す機会と捉え、工夫、改善しているか。	○新型コロナウイルス感染症が2類から5類へ移行してからは、徐々に行事の取組み方を通常に戻しつつ、改善を加えて見直しを図っていった。 ○園外活動（まめっこ探検等）を多く取り入れることで、実体験、直接体験を仲間同士が共有していくことで、行事にとどまらず、各学年の保育の広がりや深まりに繋がっていった。	4		
	⑥保幼小連携	近隣の小学校等との連携を密にし、なめらかな接続に努めているか。	○今年度は交流する機会が増え、保育園とは芋苗植えや芋掘りの他に、年長児が参加しているスポーツDEスマイルにおいても3園合同で交流ができ、大変有意義な活動となった。 ○就学に向けて隣接する東部保育園の年長児との交流をもち、就学への意識を高めた。 ○市幼研大会の発表に地元の小学校、保育園職員に参会していただくことで、本園の保育や研究の取組を認識し、理解してもらうことに繋がった。 ○斐川東中校区の保幼小中職員がそれぞれの部会に分かれて活動し、各研修、保育や授業公開をすることで相互理解に繋がり、また園校長会を定期的に実施することで、就学に向けて情報共有できたことは有効であった。	3		
家庭・地域との連携	⑦家庭・地域との連携	幼稚園と保護者、幼稚園と地域（未就園児等）との協力関係はできているか。	○園だより、学級だよりの発行についてはできるだけ、ホットな情報を提示できるよう努めた。特にまめっこ新聞（ドキュメンテーション）活用には力を入れ、テラスに掲示しながらいつでも見られるよう、各学年において工夫を加えてきた。 ○個別に個人面談を行うなど一人一人の実態把握から情報共有等細やかに取組んだ。 ○未就園児教室に参加する人数が少なく、今後の対策等考える必要がある。	3	○コミセンの活動・事業（さつま芋作り、おいでませの会）に積極的である。地域の人・もの・ことを生かした教育活動が計画され、実施されている。 ○園児数の減少傾向が気がかり。このことは市全体の問題であると考えられるが、今後については、関係機関を含めての対策検討が急務である。 ○HPには随時、教育活動をブログのようにアップすると募集に繋がるのではないか。良い活動なので、広報してほしい。 ○HPが充実し、日頃の取組、特色あるの園活動がよく分かるようになってきた。 ○入口にホワイトボーによる連絡板の設置、園だより、ホームページによる活動紹介等を通じて、適切に情報が伝えられている。 ○地域団体との連携のもとで、「ふるさと荘原・斐川のよさ」をしっかり取り入れた教育課程が編成されている。 ○幼稚園教育のよさをもっと地域の人に知っていただき、理解を深めていただくとよい。	○少しずつ導入し始めてきたICT活用の更なる有効活用法を探り、取り組んでいきたい。 ○園児数減少を食い止めるためにも、しっかりと幼稚園PR方法を探り、ホームページ活用や運営協議会、地域の人々への呼びかけなどによる効果をねらって取り組んでいきたい。
研修	⑧研究・研修	教職員一人一人が、園内外の研究・研修の機会を自己研鑽の場として受け止め、進んで研究・研修に取り組んでいるか。	○今年度は市幼研大会を開催するにあたり、これまで取組んできた研究の取組を再度見直し、園内研究を重ねてきた。また幼児教育指導員様に丁寧にご指導をいただき、更に具体的な保育の改善に努めることができた。 ○今年度は各種研修会や県幼研大会も開催され、実際に参加できる会が増え、それぞれが学んだ研修を復命し、全職員で内容を共有することができ、自己研鑽に繋がった。	4	○今年度は市幼研が開催され、運営協議会委員も参加させていただいたことは良かった。来賓を含め、大勢の参加者がいる中、子供たちは淡々と日頃の遊びを楽しんでいた。実際を見ること、話し合うことは大事で、それぞれがたくさん学ばれたと思う。「研究会」という緊張感のある雰囲気ではなく、気軽に学べる「勉強会」のような形になるといいと思う。 ○市幼研大会が開催され、多数の参加者がいる中、子どもたちが活動に集中していた。保育案、教材も工夫されていて感心した。教育長様はじめ部課長様方が最後まで参加されていたことも良かった。 ○市幼研の研究発表では、主題にそって計画立てた研究がなされており、きめ細やかな内容だと思った。 ○普段の公開機会においても、荘原幼稚園が大切にされている教育方針が、職員一人一人の幼児とのかかわりの中に具体的に表れており、研修を積んでいる様子がうかがえる。 ○教職員の意識の高さを感じることができる。	○今年度の研究の取組から反省・考察し、来年度3年次となるまとめに向かって、成果が出るよう努めていきたい。 ○来年度も今年度同様、記録日、園内研究日を設け、指導員を招いて更に追究した研究を深めていきたい。 ○それぞれの職員が参加した研修報告を受け、更なる研鑽に努めたい。
組織運営	⑨園務	教職員は、他教職員と協働し、計画的に園務を遂行しているか。	○保育補助教諭や保育補助員を配置し、各学年の担任と連携を取りつつ保育や様々な業務を進めていくことができた。 ○年間の行事や園運営においての準備、作業内容等を早めに計画立案し、取り掛かりを早く実施するよう努めた。 ○正規職員のバランスに偏りがあり、園業務を平等に円滑に回すことが難しい部分が見られる。	3	○教頭が担任を受け持つことは負担がとても大きいと感じた。 ○研究に向けて時間外労働など職員の負担もあったのではないかと思う。バランスの取れた園務遂行に今後も取り組んでほしい。	○園務分掌の分担を配慮し、何事も早めの計画立案に心がけ、取り組んでいけるよう留意する。 ○職員体制によって、一人にかかる業務量が偏る傾向がある。全職員で協力し合い、助け合うスタンスを第一に、声をかけ合いながら任務を遂行していく。
安全管理・保健管理	⑩危機管理	園の危機管理及び幼児の安全や衛生の管理体制を全教職員が理解し、適切な対応に努めているか。	○普段から手洗い、うがいの励行を継続し、特に給食等食事前やトイレ使用後の手洗いには留意している。 ○地震や火災等の避難訓練を定期的に行い、放送を聞くこと、指示をしっかり守ることなど普段から聞く姿勢を大事にし、緊急時の周知徹底、敏速な行動に努めてきた。	4	○正月から大変な災害があり、いつ、どこで起こるかわからない不安がある。様々な災害に対する避難訓練や保護者へ無事に引き渡すシステム等、日頃から全職員の意識が必要である。避難訓練は大事な事、ぜひ続けてほしい。 ○園内の環境について、園児が安心・安全に活動できるよう環境が整えられている。整備された環境の中に先生方の教育の意図が伺える。 ○新型コロナやインフルエンザの流行に対して、適切な時期に適切な処置がなされている。 ○幼児期からスマホ、ゲーム機で遊ぶ時間が増えている。健康面も含めて向き合い方を学ぶ機会を増やしていく必要がある。 ○交通・防災教育を親子と一緒に学ぶ機会を作ってほしい。〔地域を巻き込んだ活動も必要〕	○今後も衛生管理を徹底し、安心安全な園生活が過ごせるよう職員一人一人が自覚し、園内衛生に努める。 ○予測不可能な災害に備え、避難訓練を実施すると共に、反省評価し、次時へ繋ぐ。緊急連絡が徹底するよう、常時マメール確認を怠らないよう留意する。保護者への速やかな伝達に留意する。
教育環境整備	⑪園地・園舎・遊具等の施設・整備	園地・園舎・遊具等の施設・設備を定期的に点検し、必要な改善・管理を行っているか。	○定期的に園内外の点検を全職員で行い、複数の目で確認を実施している。点検時以外でも施設の不具合等が見つかり次第、施設課へ連絡をとり、敏速な修繕に向かえるよう留意している。	3	○怪我や事故がないよう点検に留意してほしい。	○日常から全職員で施設設備等の実態把握に努め、気になる点、故障や破損個所を見つけた時点で、管理職に報告し、施設課等への連絡を速やかに図る。

※自己評価の評価基準　４：十分達成している　３：概ね達成している　２：改善を要する部分がある　１：大いに改善を要する